

## ヒアリング・ヴォイシズが拓く精神看護の実践 — 「声」を聴く体験を考える —

○小松 容子<sup>1,4)</sup>、竹内 瞳<sup>2,4)</sup>、松本 葉子<sup>3,4)</sup>

- 1) 宮城大学 看護学群、2) 聖隷横浜病院、3) 一般社団法人SCRAP&BUILD 訪問看護ステーションヨハク、  
4) ヒアリング・ヴォイシズ研究会

### 【背景】

精神看護の領域において「幻聴」や「声を聴く体験」をどのように理解し、支援していくかは重要な看護援助であると考えられる。従来、幻聴は統合失調症などの症状として位置づけられ、病理的な現象として評価されることが多かった。しかし、近年の当事者研究やヒアリング・ヴォイシズ・ムーブメント (Hearing Voices Movement) などの実践は、声を聴く体験の一つの「意味ある体験」として捉え直す視点を提示している。そこでは、声の内容や関係性を理解することを通して、当事者自身の生の経験や物語を尊重し、回復や自己理解につなげる試みが行われている。

精神看護においても、こうした新たな視点は、従来の症状中心の理解を超え、当事者の語りや体験している世界に寄り添う実践を拓く可能性をもつ。また、WHOが示す地域精神保健サービスのグッドプラクティスの一例としてもヒアリング・ヴォイシズ・グループが紹介されており、精神看護においても、積極的にその体験に向き合い一緒に対処方法を考えることの重要性を示唆していると言える。しかし、臨床現場では依然として「幻聴=治療すべき症状」として扱われる場面が多く、看護者がその体験をどのように理解し、関わっていくかは模索の途上にある。また、看護援助としては、否定も肯定もせず深く追求しないで体験に伴う辛い気持ちを受け止めることが推奨されており、どことなく矛盾する二重の教示に、結局どうしたらいいのか臨床場面で困惑している看護者が多いのではないかと考えられる。

### 【目的】

本ワークショップでは、企画者それぞれの実践的・研究的視点から、「幻聴」や「声を聴く体験」をめぐる看護のあり方を紹介するとともに、参加者との意見交換を通して、その体験に対する理解や支援

の新たな可能性を探求することを目的とする。看護者自身が声を聴く人々の語りに耳を傾け、その意味を共に考えることで、精神看護の実践をより豊かに拓く契機としたい。

### 【内容】

- ・前半は企画者それぞれの観点から、「幻聴」や「声を聴く体験」に関する看護等についての話題提供や問題提起をしていきます。
- ・後半は、意見交換を通して、声を聴く体験をどのように考え、そして捉え、どのように理解し、看護実践へとつなげていくのか、全体で共有しながら探求していきたい。

### <予定>

1. ヒアリング・ヴォイシズと精神看護の達人たちの実践との共通点
2. ト라우マ体験の反応としての「声」と神話学的考察
3. 声を聴く体験およびその大切な体験への看護の姿勢
4. 意見交換・全体共有

### 【倫理的配慮】

本ワークショップ内での意見交換の内容は、守秘義務を伴うものとし、参加者の個人情報・プライバシーの保護について十分留意します。企画者らが報告する内容に含まれる事例等は、個人が特定されないように匿名化し、個人情報の保護に努めます。また、企画者らは、ワークショップ自体が安全な場として機能するように十分に配慮して進行を行います。

### 【COI開示】

本ワークショップの企画者らに、開示すべき利益相反関係にある企業などはありません。